「娘節用

へ13
3695
3

門へ13
號 3695
卷 3

器の吉式を蔵るのく。初秋月と茶人は一
緒に茶を。旨き物を食ての為。小児と意地
張て連中。婦人を視て月の形式の
故陽家の高なる。視て趣向の
あらーーーー。然れども誤れる。おくやとと
蘭語で賛美言を。戯作園の看的。海利

よゝぼの[illegible]高く詩歌を[illegible]の山ほどゝ。
貴ん[illegible]を欲すれども、言葉ばかりの農家の
慾情活業原うゝ忘敵。蹴ばの傷の手板ハ
夕河岸の魚を殺ゝ舟 荷ー。近屋娘
せゝ開の刻成ゝ[illegible]。遅きあ神[illegible]
[illegible]ゝ上ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ書[illegible]

より。付を求ゝ居催促机下ゝ長眠ー。
調布の新を独[illegible]。茅を採ゝ斬[illegible]
有ゝ[illegible]ゝ[illegible]ん

甲午ゝ
孟春

三文舎主人

題美人
拾亭年人

舊才の馬意を
倣く
國立画

假名文章娘節用三編上の巻

江戸　三文舎自樂補述

第七回

生者必滅會者定離。浮世のるゝひと悟りる。言の今こそ
身のうへよ。ありしあるうゝ憂喜哀。思ふ公勞もかゝりの覺悟といふ。さるぞ食の安堵。浮気
を捨て真實の二世成こと世とちきりてる。かゝる中の金と鄭の
高い山ど今さらふ。愛理といふ名せるまて縁を切りんを

ゆゝ。ふ牙を刃ようくるしくてとやせんかくと案ゝまぺ。あルト
るれど猶おもひまさる苦勞を狗の中ふ。亞どころさへ泣の
こゝひを鬼ふ持とても。たふかけてる愛おづうゝ。ふふいまあ恩
思と。牧若の伴ちがゝ。ふゝ。かりひるやゝゝ。左ゆもかく
ふも来かけて。孫ゝとあるる縁ふゝ。るまゝいるといひゝ。
孫後ふくしゝ受人ふ。女子い罪の涙き牙ふ罪かさりていろ
の世ふ罪滅さんやういるゝ。うきき縁ふゝい恭の世の因果と名し
定めるべくとゝゝゝ牙をゝゝむよゝるき罪をるきりのをゝ。

あ〻きなるき世を悲しとも心ぶかくそきのいとをしく。生ききのある子を
捨てゝ。とゝしい男のくるあるゞ〻。くゝきに冥土へ旅立んハよく〻業の
深き身と又くり返へを迷ひの闇ふひとり狗のくるしめつ。年ごろ
日ごろの辛労がつもり〻てこの頃ようき立ぬ身のむをわきて食
るも日〻ふ不そるものゝ。面もかくちもやせがれて。うく〻と
手を痛むもとより世あて表をあり。かくり一種ふ金五郎いあん
考ると大くるあ〻まで業よ医者よとさゞくふてゝを祈り手を
つけてりとりやさしくさるふつ。ふこいひとでその情のあつきと

恩の深るをかゝひつゞけ考ゆとバ。りふ義理でも捨ても。いとし
丁愛の妻と子を。捨て死をべきあうもあく。りそのゝふ白髪ゞ
絲きろてくをとさのこゝる。ゆをうちあり金五郎ふんあ！
てゞん合しくるゝ〻バどうゝかうゝとさゞくふてゝろもこゝをま
来をりて。病ひいまんく〻まるゆ。森でも死てものゝ不せるの
こ。既痛とあゞく。歯のりくゝふ。狗のやをまるひゝぞゝき。金五郎
いつとあの身ゝ。あん考るとひとかとゝ〻ゞ。日毎〻ふ彷ひ来
る分。今日こも例のとく入り来りて。

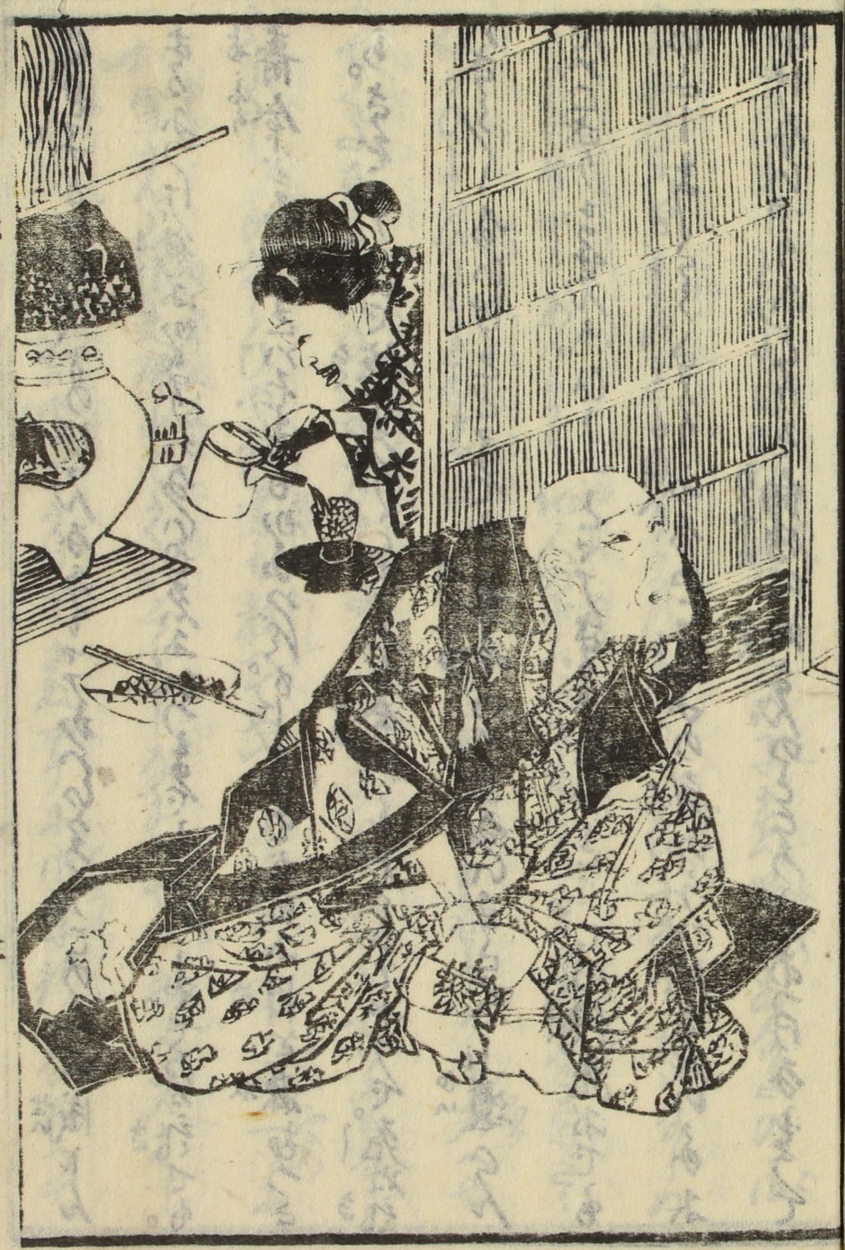
金五郎「どうぞふこぞあハちつとも快方のト とりまでおこハくろうさ事中々気のかわをもるよ
はな「ハイやつぱりかふも今しる迄でどうもふさいでありませんト
金五郎「さうかへまあきふどうも困つたものだ薬ハ毎日せひ出してのむかへ
むらぷだア立つけて呑してくんなよト うしろをむけバこちらへききをつぎながら はな「ハイありがたうござ
さけ精出しておのませやてえやくおてろよくしてあげたいとぞんじ
ますが。今度のお医者のお薬ハ。まへとハあつりふくいそうでわつちら
どうもきろどりません 金五郎「そりやアなりいのか。どうで薬ハのくふ
くひでいくら注しもきいんでのむまのハねへが。そんなふ無精じやアぶふ

いかねへ。それハ一ト月の医者ふかけてゐる。わつちもいそがしくわへかう
ござへぞのんなら医者をかへるがよからう 小三「十二月の方医者さまも
お功者ござらう。久しいまへからおよびまへしたけれどどうでいかふ病気と
いふものハ。なかなかしいるみハないとやまんかさ。お手をやんでくださいい
ますな。みなさんのおへでひより。あなたふ御苦労かけまんてござ
と。おりひまハしまいとおもつく。いつそとのまく死ふましとおもうがそ
ろうましてござひますせう 金五郎「まさそんなむ無理なことをいふ
なふ死ぬのがましみてのろ病ひハ気から病なるといふから気のわる

ゆうでたべくも毒り。毒くもあるのふが多くの毒ふ出さと然ふと死ぬ
たうがまつ〳〵とこれで毒を病むものぞ〳〵。ちよろとしこと病毒も病ぐ
あつわへのぞ「そもそもどうもぐ〳〵毒でれを病むれいとぐいま
せんぞ。あとより苦労病ふまもつきもあつま〳〵ないとともれふ毒
つそ。あんまり涼くもぐへまんく〳〵「そもぐ苦労へ病る目もね
をふ考へて。毒でれをりんで苦労をしても。まふ〳〵わへことろ
低ふあるりのろナ。余ナ毒くろうで命を削るゆりりぐこの物
平生あとのろを毒つく。人のゆ〳〵ねへくろうをしてこ。る

のハ。涼実ふまーいハ山〳〵ぐぞ。とんあふまろてくるとちやア。実ふ
ろうも困りきるぜ。ぐ〳〵ハ考へるハさ〳〵ふとやめて。苦労ハ地
獄へでも捨て去まふぐり「あのこハさうへトにふおろ〳〵やいちんぐ逃
も女ハ罪ぐ涼い〳〵。苦労ハ一生放まません苦労よりとのう〳〵ぐぞ。
さきへ地獄へまありませうトあハまるとをりひ出ふぞ「その毒のふ
せへのぐ病ひの系ぐ。老人ふあんぞーやあるふへー。老〳〵きの病れで
一死ぬりのくる。ちろと毒をきりけへて。向島の姉ふのところへ保養
までも行てくるぐり「まさくもも向ぐのの姉さんふ。久〳〵く逢ひ

まゐせんゝ。このるゝどうぞしてまゐりたいとぞんじてありまゝ。
老おゐ定ハ世のゐゝひ。盛りの花も散るハ常。定めなき世とは
まんゝ。あとをとも志まぬ是さくゝか身のうへ。すゑの変ぢあつ
さゝべと あとのひきてむる世まり 金のゝ名と金の助の 顔をえつる目ふるゝご。袖ふまよ
まそ孫のうへふ。雲と蔵を子ひふ。ふしんふ金ゝ仏ハのびあ
がりてふこの旅とつくゝと 見てひぎふ金の仏 おろろちやんなふ泣のゝと工。
おとゝちやんハ叮いゝ。坊あやまるゝ 怪君ちておく君よウト いきてふこさ
まゝり 色こ君を君のびて 下愛きあまりてせろるきい。狗もまりさこえろり
ゐる。金九郎ハ男ひふ。ドふいきゐ。ゝひまきら世どふ三の狗を
却ちゝり。せまき世のとろ町。よりゐき善労ふ元つゐこり
ものエもあゝんゝと。おりひ見ーて狗せまもど。さとゝまでとて
ちる紙ふ洞つむぞ工理ゐゝ。乳母のお乳もかゝゝふ二人
ゐとろを推量ーて。共ふゐるゝぞふむ世ひろる。ふこのふ
のまゐぞりんせもゐく。ゐゝーゐ悪ゐ。ひろゝつまゝゐるゐを楽ー
立ーて。あんまり 泣ーくゐつゝ百君。ついゐゝをとふーくのを。
且那ふ。ちゝゝまろとろと参りひ。あやまるとろの去ふちーを



巴高

なぜ子どもとのいうのかとんなかもマアあいしろう。この子の成ん
まるふつけ慈ふかぎりいあいもあふいつまでもこうしやであるえでも。
寿命がなけまいそまもかなうべ。ひ一あもが目を森もつと
ら。さぞマア改で泣どろうとそまもが今めーるんまでりで。死ねえ
いさーるーあいけまどさそも長命のできるいまこうし。遺ぐん
でがどざりまのせんろ。ひよろとマアさろさるかこと。この後死ぬでも
いこーまーこーこりおるいこのこの子の身のうへ他ふんのふふ
ひけるいのりふ。とうそ向橋の姉さんのこころへまあつけみまうて

くださいます。とそも日ぴで育つてこうこの子。夫へ嫁あるこの市
京智をつぎまんこともりまんまいこー。表子ふまーねべるーめ
生さき。今ーまーあんまり他人の中でぴりめらもこり苦労をさせて。
根がひよろいの生まもの。出りりふでもるりませうこー。外へや
つてくださいまんなが市が才もでざりまんまいが。六つ七つふもるり
まーこーるるーひや読書も。教へてやつてくださいまー。又二つふ
ハか雪さんと。市夫婦中こうくかこーるまろて。市祖父さんまど
ぬ市夫婦へも。市苦労をかけ中さんまりふ。市孝行ふるもつて

くださいまして出家つとくハモウこの世ハ名。仏夏供養をして
くださるより。思ひ残をるものなく。うめくまん。おのとふいこども
の時ろうかのごくやうにてひとりとなりの〜ばん恩をうけまして。
この世の縁が薄いうして。この子ができても未あけて添ふふそく
まこの子の因果。仏のむくひでこの世ハ後生のこるい生をうと。
いくらびおりひやへしても。うへられてでできりまんが見もやつ
ぱり女の悪癖。このうへのお情ふハ。まさくしのの〜ばいあるのかの
寄へどうぞやうてくださいまして。そふしてあの世へ行てがてんれ

かうまでもうしたこと。そろそろいやうをできこいまいるが。今の子ハ
しいこ。お家へまもうてくださいまして。又もうこどとりろともか金五郎
そんなつまらぬことをいふよ。あんまりくどくくどくこの子
せこのどやうれへろ。この一日二日ハまんでもかまこの類之ゑるとまあいこころ
ぶいるまろうりいふく。おこまをとうろう寄ものこころくあるまりごくち
なことと考へ立てこれでも病人とりわけくこの人ふ寄をまろうあり
りつぶいぜ。お雪ふひどくまぐるをまるく。それでこんな病気ろか
るのごろう。あのこのお雪のまと従妻しとのハまつてあるあり祖又さんや

親父のこれやもうのあるぞ〳〵。何も今さら〳〵おめえを捨るかも今〳〵又
金坊がてきてろ〳〵。栄耀栄花をさせ〳〵まとわへがそんなふ不自由
もさせめへ〳〵。月かげ共でもうんでも。其ふうてろ出へかろ〳〵わへけりやア
いてやア わへう。俗ふる〳〵ぬのゞ浮世ごとハ関ふえうこふ。其外
と兼知してるふも付表ごと。まを大きくりて往生しそいるけ
るやア。其の世界がるこて〳〵まろのうるのうる。わんふ往生するといろち
やイ まがりざろけ。て雀蕊〳〵と ふこのころをるくさるてえの人
るもけりの ふもいるえ〳〵きこのこいひて蕊ふ分
らるこの日ハ金五帝も伝とるく。ふこの分があんど

らるて。帰るこてろもるり〳〵べ。看病がて〳〵ふ泊まる蕊まろう
去りがりるこのくまるこて。最更てこるくうち解る。あくる
あこと金五帝へ。早く起出仕への分るこべ。ろち帰うんと分まるて
るふ。ふこハこてろのつるまる。まるこ目覚ふるこふを金あこ
ふてうをとあひふふあるびあ
そをくさうてあやーるゞ〳〵
ゞりのざのう。坊やのるやべるこるでるーア月を家しくやつよ〳〵
さやうでびざいまんう工。どりのこてもかがりきんべ。お医療をるこいまん
う〳〵。ゆゞがおるやうびざいまんのきるんふるろきんハまざか月ざがゞ

ござりませんネ。旦那さんエ。あのさへさぞモウお苦ろうでござい
ませうが。ヤレそれにおてまへさんのをつくしでござりますネエ　金「そうよ。実に
苦労でならねへぞ。まことになんだか気にかゝることばかりよ。ヱどうも
あんどがまて安心がならねへよ。おまへは勤めの身のことだ。毎月晦
日どうしおつゐても来られもせぬ。なんでもてめへひとりがこのことを思ひ
おくれ気をつけてやってくんな。女といふものはむのせめへものだから。ひよんな
ことでも気がめへると。そもそも一ぱいに心配さト　りひきがり金さんの　おくまでおさへて　こりや
金おうや。おつかアは気くしがつよいからの。あんまり世話をやかせずに

おとなしくしてゐるのだヨ。又近日来る時に。お土産をたんと買って来て
やりませうト　ひざにゐるうつきを　ひざのうへにのせてゐたうつき　金太「ありがたうござりやす。坊おとなしくするから
うまいものお土産よ。近日おとっちゃんがきたらいゝものをまつてゐるから。坊やおとなしくしてゐる
よくまあ言ふヨ　金五「さうざうく。坊ハ利口だからのざつとおとなしくしてゐる
のみ。ぞんならおいとまいたしやす。坊ハマア帰りませう。おつかアはまた近々目をさまさん
されへからまたくるよト　いふとき金さんつけ小三へおきを　小三「ヲヤモウおまへさんお帰り
なさいますかへ。ゑんち今日ハ当番で御ざりますからネエ　金五「フウ。モウ四ツくらゐ
帰らざアなるめへなんぞ用でもあるのか　小三「さやうされへ用もござゐ

のでもおぢいさんぐらいぐろ今ハ軟ハ久保ーナ氏のオト
又そんなことをいつてゝとあるのぢやないぬ顔ッつきぢで人ぶい
しても保つ〳〵又出来して来やうぢ主人へつゝとあの間をあ
細工さんへのとろやさあぢ。ア又ぐんでも精出して茶を呑がいく
そもでもあなぢ今歌ハお出なりやゝ〳〵ちいさい子〳〵大舞なく
くり食して参る乳ぢ。あんまり迷けとバ明日のあさハ見飛参る。
そもとも利でもあるなゝさういつてあきねへ〳〵ぐんふそとく。
金ぢうの清中の奏ろまろてあります。とうぞ迷ーく

やつてくださいまし。そーてきぢ。鹿藤でぐぐひとりく。祝まさなの
二三さなの役をぐら出てくださいまーヨ。この頃ハあちこちふ
ざいぶ鹿藤がありまんそうぢろ〳〵。ぢまホアノヒリひとり行ない
うてあぶなろてありまぜんろ〳〵。特ぢのむ子守と。あてん宴
さなのお守りをうけさ出てやつくてください。爲ハきんとよふ
川がおちうぢいまんう〳〵。あダこるとろてありまぜんト
しるこのうち金ト〳〵ぐんぐる。そんなるハいつでもいまるのを。あん
ぢふびんなり
まりいろ〳〵なことをいろう。あとも帰るのがかう〳〵いやうぢマア

モウ一ぷく呑でろ〳〵帰るまと世ウト　男ども乳ふのくをべこころ
ふこハとむとをまへふこ　をのつーきまむり　あるーば
角く出〳〵なぐ　一神〳〵さだとであるこのお足を。至程ふとで
あるこ家族の附ふハ真のくろうも黄ふ〳〵。黒くなる〳〵ふ
ありこと。楽〳〵。そて明〳〵しい今の男。者人ハ夢の世ウでござい
ます。　今世　さうよこの子のできわ人附ふ。ぐんの色ウ後生楽
者人
むりなんぐろふまれこう　姫こう。つ〳〵いと名人ハ竜ハ者人　嬢ク
べの眼ふハ今最のまこそ。おすろいまもこのしくも。あ人けて
見るとむう〳〵のまりごを夢い去こ　いひくさぐ。て　年ハるんぐくも

と言〳〵わ人るまこ。あの附ふの世ウ多ハのうふ。ありう　一発ありて
見て人のものゴト　者つくるいめきこ　ふりとふきぐらろを　食の
まいきこ　分ハあまびふあきけん　おつろちゃん
坊。本でアと指ぶのモウ見〳〵ざよ。ぐんおよ味いものお長ようう〳〵
アイリ〳〵。モウ　おあそびいりや〳〵ク工。そんなー〳〵でアや。お菓子ぐものや
つ〳〵おくエョ　ハイリ〳〵。お坊さんサア　春服をあげます　食ハ乳母の
坊。春服見〳〵ざよ。梨子食べらいよ。おつろちゃん。仏ちゃんの梨子ふ
おくろよう　ナニ仏さんの梨子ふクエ坊ハらのあのざ　お歯ダ痛く
ぐろさう〳〵。信次の戸張さんふ　お祈ひか　しろう。梨子ハ絵ろと

なんへうゝ。お菓子ふあり。よいてまどまエがりへ。食の「お菓子いそ〳〵ど
りの。傅ちやんふ上がちて居る。梨子ふおく出ようト。食の「坊や
なぜそんなふどでをいふ。梨子ふ悪いゝ。どをいろていじる
ゝ。おつかアのれをがまるくなるのど。おとなゝくしてお菓子をたべ
ふ。
赤いうまいのがあるゝ。コレ坊や。なぜそんなふ似指をいぢるのど。
ちん〳〵
似指をいぢるとゝへ喪をあるよ。食の「喪いや〳〵ばめんどよウ
おゝろちやん似指いぢやないろヤ。なんだよ買ておくれよう。食の「ゝ
きうおとなしくしてなるなゝ。味いりのを買てやりましやう。

作法門七

お屋しきへ帰るゝ。お坊ふ抱ふして。あふのお橋の方へ一処ふ
来ふ。お菓子とおふ拾とそして何を買てやろうのう。食の「アノウ
お菓子とおりちやと。そイろヤ。アノウ仏ちやんとる花く
ろ
買てお呉ようト。食の「そとのがうをへ帰
おふどのゝ。なんぞといふと仏さんへ買て上やう〳〵といふ。れふ
なるををいふ坊ど。どぞ。マア何でもいろゝ一処ふ来いゝ。そん
なゝふ二人るふゝ。おゞ子を付てえんみよト。いつありてど
食の分ハふ坊ふどうをさきへかりて。へ出てある。
ふ三人食のうゝろより。きりの代多りを多りなゝ。食の「さやうなゝ法橋ぐんよう

ヲヤあなさ。ちとうとちろ〜を向ておゑせなさるへきート
をあしめべ金平
へふりめ人り〜
ナゼ色ごどろぞ〜ろ
ハイお孫上ふ物申〜
林がと
とエごこの世のえんおさろと
本人べとてろも消くふ。ぎろとえん
つある目ふなくどせきろる狗の世ろなきを。咲ふまぐろ〜生顔ふ
袖。あて法目をめくまなる。ゑの中の世芸八芸。なのひやる
さ人表となり
金の分八
おとろちゃん早くお出よろ。ぐろ貴様
表て待表るヨト
ナぜ〜とて金ろも
ぎろふ門下の。不ふ
うまづとくと
ヲイ。とろつア表まろさ
ヲヤどろふ

ナニ鼻緒を踏ろろさのヨ。ハテ面妖な。きのふ買さ雪踏どう。
切ろるまろハ初へけ上ど。どうもふ〜ぎ〜やれくうどうト
ちゃん〜ア〜ノきのふか買なまろさお雪踏の鼻緒がアノ
切ろ〜ろ上
金
フウとのつアどうもれがろと
平ト
ろとい
あのそん〜か雪踏をお仲ふ。ろ〜のところへおやん
みさへ〜ろ
金
ア〜ふ二本鼻緒が一本ろとのぐ〜。履く
ろ
ろて鼻緒で逃さ世平ろ。サア金ぐろ一処へ来ろト
ふ〜ハ金と立帯のう〜ろ張。ア
出ものきけか
ものを見かろて。名残りの田の

やうせう。そのりのりーをかくてハ果ドと。そひ久しくて来くゞをべ。
やうく〳〵ふ除去まひ。やうゞをうひ。ぎ〳〵きのぬけーぞく。おんなべて長さうーづうをふむひ。「おでゑ。ゆふハ
且邪もいろ〳〵市月ゲあるちゞぐう。モウ出遊して。お出なさりも
去まひー。まうもれおゲ大きふよひう〳〵。保表ゲて〳〵今ウク。
向人番へ行人と号ふよ。そもふとの表ハモウ花茶ーきの七ときも
きりゞうーー。先れハよー。金ゲりをつとてぶ〳〵と出かけ
やりよ。そもハよりーりゞひまんゲ。かりえ。おひのりるひのふ。ふ
居をおあるとるきりうー。又おとゲおうようゞひ。

愛うーハそんなふ。きくもるのりのを。ぶ〳〵と出ケ入ーー。きゞ
ちまてのハつてよりりヨ。向番の姉さんも。金ゲくゲ成人ーと
のをうえゞつー。連て来のくーとお多をとひ〳〵かりりーゞる。
マア行ってもお久けよりヨト。もより小三ハ自来くーセ。乳母ゲ金
のみをおぶハ世て。向番へと出行るっふこの姉。真名雀ハ。富来
の陽乗ふ。墨世ー。向ドゑの。閑湯村多る。秋葉ふの社の下ーり
ちくの別荘ゲ。徒乗ーて。月雪ゲ花を。ちーつ。いと来くとやくー
乗るゲ。この素陽乗ハ世をきりて。なき人の数ふ入りーゞ。おれの

衣人も真衣袋の後り多き身をあはれとなりひ。涙ふ社年の
ことなるとへ。いづくとへなりとも支給して。嫁入らせやらんと深切ふ情
重くいひけるとども。衣袋ハ今さら縁を去て。栄耀をのぞむ心も
なく。勤の身ふく年久しく。つゝい苦労も去あきさるべとと又
不自由のくらしを考ることも。世を捨静やらふ送らんとも。とあなさ
ゆしくなるべ。あるとき尼となり仏門ふ入りて。隙暮をすゝ乃亡妻
の。後の世をもとふらふとて。生涯の願ひなりとて。ひとすゝふのぞみ
なるも。本来のなるものゆ様の。清らかなるをふかく感じて。尼ふ

但世て。別荘をまた衣袋ふめづり。その庵の中ふ花を遠ら世。念仏
尼といふ号をつけて。仏支といとなむ補助ら。月々の費へつき
毎ふかなり。不自由なくくらさせけるとば。真衣袋ハ日ごろの全くも
かなひその恩義の厚きをよろこび。浮世をのがるゝ仏法ふて。楽を
加り尼となる。衣を紫雲とあらゝなる。月々ふ彼花ふて。百万遍を
いとなくろ。仏ふ仕るを身の業と。ゆいもなしてくらへ。ひとく
殊勝のなるなり。頃しも秋の中なるとば。庭面ふ様枝女郎花を
こ　ふぢ
ゝて。蔵衣なるまなどさまくく秋州の風こちらなるまく。是雲ハ法備ふ

まるのこもんと。殿下弦をえきかりてちて。花をもりてあるかりろ
ーあるど　殺おんアの　ホホ人かとまるもの　ふりのかりて　「ヲヤ〳〵まを折ー」の
姉さんどろ。くマアかゆざれ人。サアくころちへかとりナ。やレくよく
かゆざト　さるをろまんこの　ちかうどひもの　よろこぶとまうとるゝば。小こも姉のこを夏な
新をゆんてうもーこのかぎりあく。乳母の宵中ふ夏をあゆ。金の分を
抱きあろー。ゆをひきて産ーきへ通り　こやげあのどりどもとき
やレくまをホクーぶりどろ。ヨヤ法華用のかえるゝよのふ。をを方どのふ
おちをまもゆんホこのあひど人をあげと時。かまくぶちろと家ちどぶ

ろるいとが返りふ書てかよらーどろゝ。どうりみやりまをとしろそ
モウ楽ドゥゝーて。ちとろと見舞ふまるろうとかりろてみとゝ
あひあくるこーも時候ふあろろて。つのく久ふまを出うひてあこを。
まどかまを人も顔のをもろるいダ。家分ハどんぐよいろうゝ。そ
して舟でもかゆのうエ　一くエあるいてまりまうこよ。ゆんゆ
提灯もちハろくもどぶいまをんグ。只ふさぐおろりでどぶいまん
のきどろこーハモウゆまを人ふかまりてゆを法だろりゝ。
ゝ。あるこのかあんどのかろろこのとどんドまをんでかをね

ナもいへませんぶ「十二サつきのはなんの當るのだ。モウさろうなり
とむこのいひよぷなんに金がうらくがおざる。ちつとはおかりちに大きく
お茶がうぞ月つきやとりとがおとろさんに生ざれく「金がうりや。手を
ついておかさんに。ハイ御機げんようトお辞儀をするよ「アイくよく
お辞儀ができました。利口ものぢやサア〳〵おかさんに抱子をおし
うまいものを御馳走さるぞ。よくいふことをおきゝざア可愛い
ねへト今のかとひざのうへにいだき業「おけましたこれはむやみに乳母アおいでハイおむつくおまし
よいでよいの子うば「ヘイありがたふござりまするいとこは不調法さ何を

いへませんぺヲヤお坊さんおつきのやうでござゐやせんかえ。お抱子でよふござゐ
ます子エ業「この子もかまいの丹精で。ほんとにおとなしく成人さ子エ。
みんな氏より育でがうとやら。こゝまくともどうぞ面倒みてやつて
おくれうば「イヱモウお利口なお生まれつきでござゐますから。目々
お口へぬけませぬのでよその子供衆より御器量がよくまおうますん
のきさぶ「みんなそふござゐます子エ今がありや。かとろさんの御機げんよいかエ
金「アイおとろちやんおや〳〵屋敷に。お邸内に居るヨ業「それでお邸の内にお〳〵
番でおとろさんはおしきりかエ。よくするねへ。お常や。お茶を早く

ちゃうてソレデ。今そふいろこうりのを見ふやつておくまとる工「ハイ〳〵
どい今か菓子もできまこヨ。アノか菓子もミ枝どんが見て参ドキそうと
「そんなこえやく家へ持て来て金がうふ上てかくまとをしての鍋七へ
そふいろてやつて今ぢうやかろうさんのか好みうまい魚を見てかくまヨ
「ハイ〳〵かこうりまいこと」ヨトモウかろまいのなさいまいな。
今日は孤之とをいこできまこよう。久しぶりでゆつくりとむりしまや。
うまこをうをして。家をちゃくまものが何より孤之「ハンふさうされへ
女しといふものハ久しぶりで逢ても。男の上ぢるしうるんでより。

和ふんなもないのきマアかが茶ができまこよう〳〵か菓子とかまがり。
サア今ぢうり好みうまこうさんこかあがりヨ「ハイあがりがさふ。さあうまこう
坊やいこできる。ヲヤ〳〵かめうらしいの。か牡丹餅でこざいまこんヨ「アイ家ぞ
牡丹といふ乃明寺のかたぎサ。そち〳〵ふあるのハ教ゑるといふか菓子
で。ふあ方ぢうぢ〳〵ふ高の衣ねざろ〳〵こえて木後「ハンふさやうで
ございまこうヨ。サア坊いこきてあこえ。ぢでアふもか相伴さをませう
「今ぢうちやん牡丹餅かいちいヨ。坊こんと食ヨ「ハンふ誠ふかいこう
ございまこうヨ。乳母とんざよいか菓子どのうノ「さやうでございまこん

このはるのお菓子を向島で賣まんのとさうやり森ード　ませんこエ

そふさモレお姉さんエ。こるとハ市場近所で　初めまーとクエ　アイ　逝き

この秋葉之の裏門のゑりで。ちゑハ出る乃サ。松花園といふ所ぢ

ちうごろ賣　初めくごうとんさようくまろこエ　さやうでございまゑ。まを

美味でございまんろ〜。坊ゲ大収びでうんといでできまゑ　そまハとうつく

れ人金でうこんとかこぞ。乳母ハ酒の方ごろ〜今ふか着ゲ来ると

一トにあげろ　イエ市酒ようクヌこのおんぎと　教ちハ徒樽でござい

まゑ。そしてこまあ羅をでございまろ〜。かつくいあやかまをなどふ。

ようろーうでございまゑ。ちまいゲふたやり出ーーませう　紫　ようろーうのの

処の本屋みでも。人をつくへさる　教あふ。いつでも買て来ようとおつーーする

そふさ。どこでも評判がよのろ〜まあやつて来るのサ　ちんふ　和泉屋　合

ードやア　扇ふなりまーさふエ　この長ハおまま人。梅屋敷の七種ゲ舞り

ごろ〜。ちいちう見物の人ゲ出るヨ。そまふ蓮華寺の大師さまの

お庭ゲよく出来ろ〜。ぐんぐごろ　ちも　縁やろふなるハふ　さやうで

ごぞいまゑモ子エ。ちさろーも出やもくまーーろ〜。坊をつまとて梅屋ーまこ

の七くさろ〜蓮華寺の大師さまへお参りヤませう。今年ハ且那も

茶店でござゐますさうな。お身のうへに行るゝもあのやうに。金ぶつの
光を見やうとしての。後の世の助かるやうに。よく祈つて參りませいト
わかりとなごりをおしみぞ出る雲も何とやらあはれなり 「なんにおまへもきなさつて似て後生願ひ
ごと見えるね人。金びかりに返照ござりますから。三松と一処に。お庭の池の
緋鯉におまへ菓子などもやつてお遊びト いつまでも金の色かゐそくよみがへるうちおもてをひるまもおかわりくるる 洞
市の三松と相手にして池のふちをめぐりあるき。緋鯉魚のえさなど
遣ひまへし。余念もなくぞあそびける。

假名文章娘節用三編上之巻 終

假名文章娘節用三編中之巻

江戸 三文舎自楽補述

第八回

その時紫雲ハ長羅宇の。煙管に刻莨を吸つけて。お三に
さりながら「なんにかうしてやましいかあるてこのお身うるさい世帯の気苦
労もなく。親兄弟なき辞なところに。浮世を捨ての楽なおくらし。
又さうしても どうぞ三日なりとも。仏につかへて死にたいとかねて
願つてをりましたが。身の罪障が深いかして。そのまゝさへかなへぬ

貴賤貧富。をんの因果でぞりませうト
雲もなくふとるなくむれ世まりの
をんのうらの子のうんぞりしらしとおまへ人の俳言世ふ在て
たそ人ハ花。金ぞうとりふ実と結んで。貴賤ハあろうろ又楽しく。
且那も人ハおまそぐまるとろと。発明みおろくこ四条ハ
ちと要楽でハ子。おりしろのうりもおろうい変もこのしくもかるしくも
あろうこの世の世捨人ぞ。をんのお意であるこの子。色とふ変まろ
因縁とろておしとろて又変楽。姉妹二人ぞ同しまりふ浮世を
捨てハ七紙とろの。異捨のしあとまりまでうろ。新つてそとでハ

界義の罪。せあておまへハ人をしふ。世をとてこそあ紙ぞ。第ふのあの
新かしふよろとびか。をんぞしろうぞ。ろうぞ第をろうやまるいと
金ぞうや。且那を朝業大切ふ。ろうき貴賤をもちんろうして
末の栄へをこのしふ付義をまろのが楽のくれ。をとしの
ことをきるくおろて。あんまり貴賤ろうろふしぞと。大ろぞ
らひふでるおろうも者とを。紙をきろめてろてふも貴賤を
きせておろとでるのいと。をんこのとをとうまるしさあまる。ふるしふ。間を袖ふ色とのれ
袋をめろしふ者をろくハ。組を人法花のりを楽雲ハこをとをあんど

つらひ備や金五両がふところえかぎり。お雪ふとてうそとりのせし
ゆゑ胸をおさしめ気をつかひて。このまゝりひの出しうと覆引きて膝
とせ 葉「おまへのふさぐをみるにつけ。病ひの根がきとなひらばにも
つらしへ薬ドらまるよ。痰や血の乃でぶさぐのなら薬しるべどの
つけもないが。病やつひどく気をいため。心のつかれのいたつひりと
えらへひが目うきつうないが名案ふ落ないまでもあつて一人ぐく
心労してゐるとよく。なにごとか考へ付ぞ。苦労ふくらうきまそう
ゆゑなつきうぬとを考へ出せうくしとんく病気ハなをると

快気わりハまくないものさ。他人ハ格別真実のつきし。世を捨
し身といひながら。苦労なことがあるならばおまへの胸を隠さずに
ないしで見せてからまるし。女の智恵の浅さでもそこを膝
とも得心づくべぶてぬでこそ実の姉妹。めしてき峠がまるいふ
つけ。義兄の為や行ちみつけばおまへのるすが気ふかゝり。後
生をあれやきまふげと。おまへどん丈の何まもしきに浮世を捨てた
やつれたり苦労心のやをまるひなれないハ子トの中みなさけとなくぎ
とやく姉の義兄のありがささふ。こハ始終浅ふくよ。胸もれり

さくだりみて。頬をえあげをあらう〳〵。袖ふり上げ眞ゝ
まゝ母の妹とゝ。ながらへてくださるべこそ。お業ドるもろくての
仮くのかたたぶ。うまゝ〳〵いふつけ悲〳〵いふつけ。なんでおなごを
へどてまるせう。この世ふ杖とも柱とも。ちろ〳〵ふおもふへあること
ひとり。浮世ふ人ハ沢山あるとゝ。考へてうるとかまへ人さん。ちこと
くふどる因果共ハ。あんまりふふハあり半ん。生きと恭る
と祝ふ丈るまゝ姉妹二人揃いもそろつて。故々をとゝをふる
ぐゝ。あゝぬ東へさるよひ赤てうき川。竹のるゞまふ。

長労ふ人ろうを忘れいとあげくふ。あるこハ移ふ変さとうのふ
人のあるくを別まるもうさも。ふ差い別そうふ世を捨て
附金ふ。ふ弘の為ふ。ひき久まうハ恩と情を捨
ふ。信道の義理ふ世ろ〳〵ふて。日陰ふ咲〳〵仇花の勇て
ふく別いとゝねどまゞ拙子もふ人ふて。育てあげぬ
一つの乳がり業〳〵そのるでしゝ子ゞ家ふりとハユトそろづき
ハサア。その乳がりとハ金ゞうがる。とかく出ちろ〳〵病気
西反ふて。言てふ業労ふるり。どうぞ丈ふ育てといと。

かりいきてゐる子供のみ。なほふが給ふ彼が食べさひと
そまちく日ろる一日ろるそどのあさごろ。ねごろ ごとる
三どふ一どハ食ろぬかうふ乳をつけて。ごそうもろせべごそうん
せもるくいやくをして泣きたろ。ツイ丁愛さふひがさまて
癪でおどんより早でまろ。ねごろお菓子をあてがひ
まもと又食をぎてハお彼が痛い。痛いくの食傷の気毒ふ
出乳でいつもちよろとハ直ら一緒ひよいいうまもどのふ。
ろとその乳でそごてぬろ。特病身ふなりまもろと。なりハ

不役がいやきして。よそのお丈の子供のまうふ。お拵もしを
つよくも考ろ。むぞんだくそごちが情出しそこふのしぬかこの
いろ。出ふるりまして。出人ろして。出で丈ふ育つまろ
ごと。なり人が且那ハ又彩色がコるいの。育てごくがコるハろ
のと。あの子の身の為をかりて。ふ言をかろ。雪も無理で
るいが。まごまろ。九三歳ふるろるるぬのふとろそごち。
出産落ろ。ちやろやのて。あんまり大ふふ去をぎこと。コるが
まく乳まくふ。月つ業。今更去ふ。お加入しろ。泣附あこまを

寺ごろうしてきびしく考てうこ[illegible]低もおしづかに寝りまをうが
ないでさて。ひとえいてみろ。そもそもこを発る風の出てもうに出ぬ。ぢんこうの
病身ふりまをもどころう。可愛しのみつけ果候ふつけ。苦労の
やまるひまもなくこれで身をつくひまもなく夫ふ今の病れも
おろりまーこの。是も是こうーグこれグちいさいろうせぼとこと
苦労を余牛ふいてーて。考余をちぐめまをも忘ろうこそも
名生ができませんグ。男人いまとふ世の中おどろるさいりめい
ぢざうよ世んそもそも表ふこそあるもこの中身グ。おろうーやま
ーうどころまんト　ろうどろうのかこうどを生くもろうこの目を
ふさぐるおもをを忘かろーつ　ぢんふ
そふ人ばこうでもあろうけもとともをもいろんの一陸だやい強だ
世の中ふ子宝とさいふものを。大切ろ金銭よりも子ろどまこさ
つこ宝いろいと。強しも考こと世の常義。子をおこ身ふ苦労
の絶ないおまえ忘りでいあるまのーこんろ世るのろーひざ八子。
子貴でも下賤でも子ふもろこさるこ八銭の常。マアろるかげも
ない格の上のむーろ蒲条ふ世をおろる。食ふや食いもの色金
でさ人ふを大切ふ不愛かり。藤ろ目をねをふ育てあげても。出世の

出来ぬ乞食い乞食上さえ方ばかるのいろ。貧しいものを
男ひやもべ。多くい月も世を不自由なく〳〵してゐるハ安楽さ子。
欲ふかぎろのるい世の中ゆゑ。十分るとも不足ふおり人人
性ざろ〳〵去りともないが。おまえなんぞも日げの分で使ふのゝぬ
を美ふおりざが。満もべ欲るとりふ考ろ。十分るとこない身の
人のおりがる金銀が。あり除るるどの大家おハふを欲るおど
子ゥ出来ぬ。貧乏人の子沢山をう〳〵やむとりふとざろ。金張
づくふも換らぬハ金ゥうとりふア大身の子宝いう〳〵病身の生
付で人の苦〳〵ない苦労をするも祝とるり子とるるれとの因縁
づくざとあきて〳〵めて面例を見てそとてるくろてい祝の行目きき
まぬとりふものサアそ見ざろ〳〵ふ〳〵のるとくく業して始〳〵つ
ていおまえ人の分ふも寿命のまえ。彼子のるふもるまいろ。乳を引
出て死りぬやうれ分を厭ふのゞ仟ゑさ。世ふ楽ふも行ゆもるの。
ゴ〳〵ゞ分をう〳〵やまゞ上。金ゥうの分ゆを乞を神仏ふ祈つ。
旅人さ乞るゞかゆ人の手扱。女の乞の欲ぬとりふものゝ乞ゥ子おの
分でありるゞ〳〵。旦那のるの手助けふ。分をぎ世をぎとりふもの。

人の機ぐんれづを考る。今の身での産しき作業ハてさぞいや
ざろうつゝかろうとぞてーゞむりーの身をかりうくも替人のひゞ
怪らまて。のうゝく狗もんりさくやう。行ふうけて花ゞ絡ぬ
ゝ。ふさひて腐れのお方業。といふもの。まてと遠ひ。おまえハ身
ひろとのふていなし。幾度もくどくりハやうるまとあんまろ苦労ふ
苦労をかさねて。今のまゝひゞ大病ふるとりーものとゞあり
もーまハゞ。さういふ時ハまてーハもとりゞ金ゞうも役りゞるく
るろ。ぞふそらの赤い紙でもかけて煩ひぬやうふーておくまと

なとこうけていりとをあらまむ考ハ
せろハかくゞこあり言きものゞ。
らさいまんゞ人の命ハ今日ゞ久。明日ゞあるとて定まるぬ世の
るゝひ。表まてうゞ久ふゞ日りものるゝあろうゞ。表面ハ生身
のまとるまハ。逆さるるゞゝ市田向を。文まんてともあろうゞ。紙まん。
達者でもろてもるき後でも真身ハあるまとかひとりゞ。行ふ
つけて金ゞうろるゝをどうそかわゞひゞ。まんゞ。るいまハの振
ふも。お河ゞうるもろてんぐさひまゝと。子ふまゝふゞもんひさまゝふ業。
とウ。そんるる表まろぞいまの表ハりろてまんまでない。姉とまろ妹と生まて

来さうハ力になつたりするもとりもるのハ。そりやアいゝないても恋
まさるゝまうしよ。ゝ今悪癖ハやめて。金ぢうをつまて梅屋しきへ
でも行て。ちつと気ばらしをしてお出ト　なくさめおもふ金の分も座のあそびにあきゝるにや乳
母にいざなハれ座敷へ来ながら紫雲ハ抱きゝ愛しつして。ことの
ぶてに行気く。足より　こゝろしけるともに梅屋しきへゆかんとて、
内にハ下女と下男を残して小三と紫雲ハ連立。花屋しきより
蓮華寺の大門へ詣に出行しが。程なくして立帰り紫雲ハ種々
の美衆をとゝのへまゐく。夕飯をまてむる。飛堂に門を移しけるが。

秋の日のならひ西にかたぶき。入相ちかくなりしかバ。小三ハ家にかへらんときせるをとりまひなぐ
「ヤレ　今日ハたのしかりしが。はやかへるとおもへば身のうへおもふに胸を
ふさぎしが。そこに保养いたしました。日の暮にも気がつかぬ
ほどおもしろくあそびまして。大まけに遊びまして。乳母かまへも支度が
よいならバ。モウそろそろ帰ろうじやアないか「イヤおまへよいならバ。ぞとよ
今日ハ遊びにもまかりし。内にさへ有がすくバ。又こゝろよいときにハ
すいたらい。今夜一ト晩泊つてお出な。あんまり急ぐ事もなくて。座しきへ
出るもうるさいと。又あるといふがまゝに身まかりいつまでもまゐる気

あいさつ。森おがさりふ男のうそりよ。男の上をなーの丈をつのでぶこで
狗をえーーしてお出よ　ヲヤこりやもうこりやーーだいぶこびまをしたそれ
お名残ごろーーどうぞして。酒つてまわりくこいとでんドまんぶ。今義
ろさらーが留をのあとへひとろと旦那がお出なるとこるふでぶこい
まをそうーー。どうも坊ーーだいぶりまをそまい　ヲヤんふそうさねへ旦那
の市様ぐんをそとれてもうるし。一ト晩でも供ふるーーないとぶ。わへ
そんなーー転でおめへりる。おかーーやをてハるうろうかーー誉竜の方
がよろろうふ　ヲヤこをまふ乃びまをんぐあるいてまるるーーとと

まをーーヲヤそをでもおまえ乳をぶるいふ往還でハろをびまるヨ　ヲヤ
ヘヘ　新でまをらーーづ改廊ののーーを門ハ歩くるうが物ーみでびきいまをす
ヲヤ　さうふ子そんなーーを全ぶりおろりも酒てお出なのう全ぶうふお
まえハ乳母と義へおとなりよト　ヲヤきまをばをハ全ぶ　ヲヤ。坊。おそちやん
処へ森仕てお泥の悪ンまつやまいやよト　おうるあぶらーーきみでるおうへる
あんど　ヲヤそんなーーぶうへおとなーーくーておとるりヨ。おでアのいよ
とをよくきのてぶをとろてもわるでハないよ。アノ門ふ居るやうふ
おこるとのおたさんが酒てそぶきーーるいよ。おるさぶ可愛ぶろく

ぐさるふう。ぢきに泣ろうとやしまいて。あくめんぐるくつくこ
まりまた　一そそどろうまをとふすまいのか。人えりをまる
ふ供ハ。毛相をしても泣出まろう。うつりにもはメけるいぐ。泣
ふのやうるふてやうる。すまいいふハありません　一坊を
まをとふ仕合せものぐよ。ちんる建度い処へ泣くいでいて。ふつる
ようあやりものぐこの。そして　一ア　坊や。おつるアげるくるつても。
ふう初て泣のでハるいよ。泣とあ泣き度ぐよ。おむさんの処ふを
見ぐ。ちんとありまをろう。わとうるくくしておるよ　一アイ。坊あと
るチくもあが。おろうちゃんどてィお出ぐ　一おつるさんハのうり門ぐ
ををういろ〳〵序〳〵ないと。ふをろうさんふあろうまるよー
かれ　ふ　見ぐ衣殘ろうるーもといいねど猫ふせきあどて類をうつめる
目ふ減ちゃぐーをとんもあろうりしぐ。終りまうんとむつき泣風ふあ　一ふハ
ふふ供といふものハ物をいろてる。我度中。後生ふるてこ、あり
まるれハト下へおろう〳〵　第メ度八類つきる。常ふかりう〳〵ゆう
をもの衣。ふ雲も乳母も物とるくふこの月のうハあんぐりを
ぐ〳〵ぐさふ　一どうもこをこうふ今ろうう。ぢまハを猫りの人をのぐ。ふふ

かうく藤井ぬう〜。今晩八酒つて明日の朝。ちやく保つく〜
よきそへるものぞ。のうおでア「さやうさ。旦那ごとて一ト晩たつり
のる。法をおえるし〜ゆまう〜。お孫立もありまいまいう〜。
ぜい見非今晩八かと多人なさいまつるト「そうごけとど
きいとと八「そうごけとど
ふうちるとへ来ることを。旦那おかえるのゆうえんぐう〜。酒つてを
どうも海ないよ。そもそも見非おえるゆうれがるの〜ゆるも
あるう〜。三松どんでもお借りゆて。ちうともちやくめ人ろうよ
「さやうるう〜おぐうきんもお酒ありがとうぎいまをお孫どん

おろうんでへかの人〜ゆ生とまを人。ちとうるお供いうて。悪ンまを
又四日。こんおまをりゆ者ちう初人お坊さん「ブウ。おでア坊保ものいや
くぐ〜ごと悪ンあの処八泥ちうよウ「あくさうめどうもこうり
きうくこうるくどういて〜〜よくろうゆ「そんるう〜新〜
せうゆ物と乳母いかとありと極て。ちうさんふい三松ふ久助を魚
てとこりとを五で八業考るゆもあるまい「さやうるう〜どうぐ
たんるうそくさいます。ヤレ〜そもで保つきまう〜とト。こうなく
ふ三八法雲と今の方ふ。不法のことをが五えげと油

さてやうく〜あるく底撥ぐんようう。底界でもぐざりまゐらう。
金ぐうう〜ゆをかねぐひゃしまゐ。だくアそんるく〜このんぐ金
ぐうやあうろアハモウ行うく〜本とるく〜くして撥ぐんようくかぢびヨ
あぐうく〜ぐうあうく〜べよト輪界の律ふひゆ
きてそ月名残のやうせるく〜雲も乳母とあうとも。金のか
のをひきいはまで。別をを惜く送るる分より送〜くる分を
この世うく〜ゆうく〜き冥途の旅の空へ清めくあのと惜うく〜も。
さうぐくうるきこのの方を。拔るる分も名残惜のまゐ身の姉ふ

涙きをさそてこまるものふやとあり。ありて八目ふ涙界まで
名のお祝者の。離ふ別をるひふく。乳も絶くふる達の。空
常の風ふひぐきを来て。身をつ〜ぬく入相ふ。おどろるきまてれ
をるるう。心願くてかるつと。別をてらそハ帰りける。さる
程ふ金五郎八今紀ふ三ふ別を附常ふかりて名残ゆ
きを。あるる心のつ〜ありしゆを人指分の侍る〜れば。をを契
りて別をしっど。その歩八歩張の者ふあうて。出るるきえる
ざる身人。心るく〜むもとやかくと。葉ドるびても俗方るく。明る

家をしまつて待かねて出産よりも内へ入りて物さうなこの常な
らねば。食ものさへ出せも表れを表へ人まを坊様まで表ぎ来る
あ
足も空ふ表ゲをて。小三の件へ来りしへやうく日の出の頃なる
べし。おしへむも おちつきこそ〳〵表れとしんくとおさき
日ろあろてあろぜ お件〳〵 ハイ〳〵 且那さまでこざうり
きんろ。ヲヤ〳〵 大きふ藤きべし きまくと
坊さいどうしとまど起れ人ろ。小三の病れゲ悪ろゲるろ ハイ
昨日ハ大きふおそろよいろて。お坊さんをお連るをろて伺ふへ

入〳〵つしやいまこそ。お坊さんハ新母どんと庄一処ふ居遍苗で。お留り
あり〳〵の男衆ふ。おく〳〵まてタべお帰りるをひまし。金ナニ
きのふ金ゲうを連て向寺へ行ろ。よく坊ろて来くこのうをこ
じやゲんをびまてまど起れ人のどろうト 女ろふこのねへ入ゲ
ヤ〳〵〳〵トびつくり後表ふ倒るれまふ。女のお件も伺るのふやこ。
ゲけ来りてやうををうまをこ。小三ハ白襦袢を身ふまをこひ〳〵の
ろふ母〳〵自宅ろ。来ふ藤て元〳〵る 件ふ。おなじくろこ
おどろきて。例をてこるく ふる人ある。金五〳〵ハ 金 ふこナセ元んど。

どうしたのか気が狂つたかコレ小三。小三〳〵ト ゆすりおこし。よべどよべど声もせきあへで訣
のなごりや 虫の息さへあるかなきかなるに。さすが男の心もくじけ。泣しほ
るゝもしらず しどろもどろに 金「コレ大事。でも人が内に一処に寐るからに小三が部
りやうもがなくて。ちかごとハ書置ぞする あのこのふ。忘るゝなと
数しても まへたが。情ねへことをしてくれたト 只とうなりふしの涙
衆門の気のいゝ者。情ぶかい佐介も掛て来りて。おどろく事大かたならず。
京 待ハ ともあれ向島へ知らせんとて佐介を紫雲のところへ走らし
らせけれバ。紫雲も乳母も仰天して。金の介を連ていた
のり。かゞやくに飛来りて。小三のありさまをみるより。あまり
のことのかなしさに。夢か実かと気をうしなひ。涙にむせぶばかりなり。
紫雲ハ親に袖ひかれて声をもらせて金五郎に小三がき
のどくさを語り。金の介の行末までもとふにかく懇に
て別れ路に。名残の涙のそゞろにも。別にふ覚悟をきわめし
母の情をや かなしさに 欲く かくしたる書置の ありしをとりあげて
「コレマア伯父ト申し。遺書までこしらへてお案内さき
るハよく〳〵のこと。ハテこまつたものと 大坊さんをとこの

世ハ捨て。後のるげきを乃〳〵めさめぬ。あんまり必くえぬお相欲
おせもつい心でどぎりまゝとト志ごろ むせひあろ。金五郎も
男子るぐ〳〵。共ふ心も消とふ。欲きふ志づくゝ。うろとりと。美
ろ況ともろめまで。加さやろうとるろ。しぐ。さまぐさかーき
ろ生まもこあ。武士の男でかゝ〳〵めぬとをろ。ろくしそ欲くらそ。人
のおもつくも面目ろとやろ〳〵。おりひあきゝ〳〵めぐ。かの遺書を
てふふとりあげ。ひ〳〵きてえをバとるぐ。とうぐ男のこあとれの
ろ。
ろと。おりひつるくの覚悟の文体。後めバよゝむろど後悔の男を

きゝ〳〵より世ハろきふ。あきゝ〳〵めてもまゝと泪ぐむ 月を志ろ
き泊をるで
一老お不定ハ世のろ〳〵ひ。墨をもあるを男のよぐときのふふとぐ
ひろとのぐ。ろへバ紀念の表とろ。浮世の義理とおをろ〳〵。
おりひろやゝて先ごろ不役さ。七法のるゆまで共労ふて。矣見
まゝ〳〵のこの書墨よゝむ男ふるろうとれぐつろへぐ。いろ世ふ
ぐ。ひ〳〵人るゝこの。ろ乃〳〵〳〵をさ和てんと。ろうとるゆも志の俗
子供の附ろ〳〵ろふろ日まで。かとりのゆ一月来も世を月新の男ふて
共労とー死。死んぐ劬労の系ひとりの人バ。おをぐ先とき門ふ

あめ百ゑ。親ふ不孝といはせど。その身を捨てしられハ。
こんしんまことを。実へてら〳〵ゆゝしい。こゝ人一人りて死ごとて。ちぶゑふかけ
〳〵も同じへの。死るぎをと考ふハあろうのふ。経文をこゝろ
こんるのなげき。叶ゑんぐゝ義のやうでかへ〳〵ぬ文ぐゝ不役
でゑ〳〵ねん。ゑ文あくぐ仏〳〵トつくゝとてふしんふおもひ「おとゝ
ちゑんさ二注のぐ人ゝつゝちゑん仏ちゑんふるつゝこゝ乳母ゑ注
よう。おだちゑんもか注ゝ坊おろうちゑんといいよウト
けるゝこはふ雲も業ゑんふゝの子のかゝとゝるゑ。後おへねとおろうゑ。

仏ゝこんふるゝこゝとハ情ゑいゝこんるゑ四ゑ〳〵の文を見るのを思ゑ
せゝこせんゝして。きゝふ功ゝ乳ふかゝ。乳母と二人でゝ見ゝゝ。
あの付功ゝまゝハゑんのゝゝ。あゝゝ〳〵命を捨ゝ世ゝ。保ゝも約
束飯ゝ外も。こんゑ定まる因縁ゑぐ〳〵。為命ゑ妹ゝ外の果
やゝ。ゝゝ人ゝハ。こゝゑ〳〵歎きかゑ〳〵て。涙ふ雲も浮ゝあり。義ゑ
こゝのふもおろうゝゑり。形ゝハ果しゝゑ。ふゝ〳〵ゑ人の。ゑふゑ〳〵ゝと食ゝ
弟ハ男ゝを元ゝして。涙雲をいきゝ乳母をえげゝ。の香
の送りもねんごろ。ふ七日〳〵の法ゝ。ゑ雲く法食

ゑ　ふるゝ。おくりー程ふ金五帝ハ。おさるゝき金の分ゞ毋ふ
別きて。後りゝ　ゝき弟とゝりーを紫ド。ゆねてふこゞ春生
より。紫雲の衆へ欲けゝまとよと。このこーとたもゝるゝ志ふ。
日ゞ　立て金の分を。乳毋りろともふ向爲へあゞけ。を柳
格の赤ハ乳かとゞけ。殘るかとゝ　ゞを祇り。とりく紫雲
の尾と分らひ。金ハ分を見ーるゞくも。只ふこのゝ見ーかね。
乳ふ在付ハ祇反ふのくとりり。お雪ふとふ芸未の姑未を。秘
しかくして張ゝとゝ。乳のひき立ぬも祇ゝり。白爲ゝゞめ赤

内の者も。金五帝ゞとの沈ふてハ。乳ふりゝて変りーでく。紫ゝ乳
ふも出ざゝゝ乳。さてハ弟持の赤りくとよりくりのくりゝ行
ゝ乳ふ楽ト新。屋宅りくふとゝのを。ゝるふつけ又白爲ハ。老の
弟の名ひゝ　ふ。倘金五帝ゞ紙乳ゝ。ふこふ怪我をさゝしも
ゝも乳。ゝゝとゝ乳ふらをふさゞのゝ。ふこの弟のゝ人ゝふゝゝ
ゝるとゝとゞれゝきゝゝうまをゝ少て安情せんと。ひとりひをゝ
ゝ乳の。ふこゞゝ乳へゞいとりける。

假名文章娘節用三編中之巻　終

假名文章娘節用三編下之巻

江戸　三文舎自樂補述

第九回

朝夕ふ。まゝの落葉を雨と見つ。冬をび老る寂しさふ。ひも空も時雨月。彷ふ人もるき草の廉へ。友さそひ来て声張い。鳥鶯ふあゝ教子雀の。ちゝよたゝよと啼声を。ぱふつけて。袁を流ふ紫雲八小三の比後を。吊らふひ多ふ金の分を。ゐぐさ為てもまゞ少コけの。泣て八母を尋ぬる事。不夜の

活て可愛さうに思のかなくひなくまの〜 金の分紫雲も金
まのりふ小このまゝ花をこむけ。念仏こまて花ぐむ五郎とりろくもふ七日〜の寺
内へかへりてあまふもさまぐちすちとひろぐ〜弟の子松ふ
えるぞ花ぐうろうへこむ 金 「ろんまの〜〜のくちやんまのくまてとへ
けてちひさまこまをあの世
来てろんまいく〜仕るとおたちやんも恋よウト こけろくれ
どかぐむとばつるふ
つけ母ふつけ。乳母も紫雲も俱るこど。金の助を紫 「コレ金ろうや。又
そんなことをしておたさんと泣せるのう工ぐ 栴檀ふと寒とやう。
やゞて放人しとるゝ〜ば。孝行共ふるうのふ。ぐ〜ぬけはりのとの
子を捨て先ごふこゞ山の中。マアどの年ふつ〜〜〜ろう。ろひゆる

ろど後生のさろり。ナ ち善あくぐ仏ト つまくる善ちも善
の目をぬぐひ ちくも。孫言と。ろひ赤ー乳を去るぞ〜まうーても。
お丁寧そふるとをのうーまう〜ト 金 もも善ちも善ちくる人 金
おたちやん処モウいやじョ。面白くるいろや。門ろうよりろくちやんへ
行ろうよウ 「又ちんるるを。ろうしやろうよ。お夢ろけのろいてぐ
お坊さんのろ宿でらぐいまんろう。門へ行ふくとろうやるのでい
ひぐいまのせん 金 「ウウ。坊の門妻でろいよ。ろうちやんへ行よろう。
おたちやん。ぐアいけるいョ。坊門へ泊やせるいよ 「ヲをふろ工〜

ならいたでアどふでもしまつしても。まださふらちんぜも
ないこ子供だから内へ帰ろうとりふと無理ではない。ふ三が座しき
渡世業で。すんだ儀にハ承知ない儀でも三日と離れて二度もないの
みやぶそれり五十日あまり。纏やうな処で育つた子がらんなさむ
しい処へ来て。鄙躾や亀の子が合点がらう。どうでも落ついて
あきるまいが。コレ金がヤ。おまへハ利口のものだらう。おかみさんの
いふことをよくお聞。アノお母さんのおつかさんハの。まきとかくおない
処へお出でなさらう。モウ内にハ帰りもお出でハないよ。それ内へ
行ふくといふうたに。お坊さんの処にいつまでも居るのだよ 金「坊の
おつかちやん死だから。お寺へ行ちまつたよ 紫「アイさうか 金「坊
よかろう坊の内に居るのだ 呆「さうかサ。よくまめるぞ。そまでらうら氏が
坊やの内だよト うたとふくりでなござらむる おかうる下女が来けあり「モシあなた どこの御隠
居さまがお目にかゝりたいとおつて入らつしやいましたヨ 紫「さうかへ。
そんならどふぞこちらへ 座敷へお通し申しな 下女「ハイ〳〵ト立て
お入まかり来たりしはひさしきとる六十と見へ白髪にて 「ヤレ〳〵よい御挨拶でござりまする
つまく入り来るは金五郎が細君白髪あり
ママは兎ものござらうとト 座にあなりて 「どうハヤコレハ金五郎めが細君で

ぢぎるがくらうとらるさんハ。小三どのゝ姉子おといふてあたぬ。爰へいひてけ
あるし云ひるゆ。たゞしおまへが孫めにかゝりて。まるで尋ねてまゐつ
たがおきし今なお客ハどうかうぬゝト いふに紫雲もよろこびるがく ならうらうもあうらくれバ。た
いんきよさんに 「是へくらあすいまなうとぞんじまして。今ス弟さんの
お祖父さんよふマアお出あそばしゝ。何にもはなきまゐる者へそり
ませんうら。何なりともかなかきあくがおそらく あるらるがよろ
しうござりまするト やましさしてお白翁ハ老の目やにをふきるぐゝ紫雲の顔をうちまもり 「ヤレ〳〵
姉様といひあるゝ。小三どのにはうつし。おまへの顔をみるにつけ

涙がモウさきだつわいなア。此のうちがこと
えん。是で前後をるのも老の癖。返座ながら一ト通りきいてたも。
そぞろまやつその子細といふハおらしやつこあらり。不思議な縁で
今五郎と小三どのと深くなり。ちかひおつかはしてのちに
深切づくな苦労のうね。大概に惚合ておつたらバ人のおうわく
世の義理にもかゝはらず。あの二人ぬにおんまり可愛がり
ひらしてなつてきたら。孫めもその積にまよふて。うちをそみの
家どうらいつぐり。一ツで年からまだども。放埓が募りぬ由。路銀の

つまりゞ業ゞ りゐて。矣見いしそも 糠ふ行。豆腐ふかも
ゞひきりめゞ作よと。捨て置てそ為ふ多〜び。み物もをりく
麻るけまべ。清月て切まぬ乃理。その清を落もふも番屋の
世さの 食せ低でハ。そも切まるとでハるいと推量をして見る
附をつゞ ゞ山の荒低ふかけそも。切られハ多〜れ 浮世の義理
か雪といふ孫娘と。祝言をさせ〜。そも孫ゐまれ悪縁と
見ふとも悪ふ孫ゆふかゞ。いつでゞめつことけ多。ふこゞの門へ
ゞれかきゞて多ふとその序でゞ。ゞ孫ゆゞ

第の久かりくいふ伏あまべ。長ふこへいろれ。ゞどふ。いやでも
あろうゞ考ゞ ゞ 多ゞ。ゞ孫切てゞさまゞ。社稷ゞ多ゞ
いあくをバ。ゞて多ゞ。義理と恩とを。ゞ伏て。
ふ門つり多ひ切まゞ多よと。いゞまさ附のゞ ゞ 絢。うまゞ
あゞて不役ゞハ。ふ三どの。山の中。さぞつ〜ゞ悲ゞ。
と多ゞまゞ。ゞて俗ゞ。ゞ世ゞ低ふ多ゞ。ゞ容良と
いひ利益といひやさゞい山の生まつき。孫めと夫婦ふゞそつ
さゞ。さぞマア。ゞひふ妹ゞ。ゞと多ゞ。ゞ山ゞ。

老ぼれ
藤のそらぢり
酒拙

是非(ぜひ)も泣(な)く／＼ゆかざりしが。それより後(のち)へ金五郎(きんごろう)めも。そこ／＼にかへる
ゆくゑもなく。内(うち)にもをられぬゆゑ。徒(と)もにて其所(そこ)の百姓(ひやくしやう)の方(かた)へ
内(うち)のものがよろこんで機嫌(きげん)をとるやうと考(かんが)へ。くゞり部(へ)
屋(や)にとぢこもり。何方(なにがた)の屋宅(やしき)をやりくりをみて八文字屋(はちもんじや)が親(おや)の
つねならぬ親(おや)の老(おい)もお雪(ゆき)めも。今(いま)しみじみと苦労(くらう)がましく六ヶ年(ねん)も立(たち)
気(き)にかゝり考(かんが)へくらす程(ほど)。合点(がてん)の出(で)ぬ金五郎(きんごろう)が行方(ゆくへ)の
色(いろ)で。愛相(あいそ)づかしの機嫌(きげん)まで。癪(しやく)でも付(つき)て腰(こし)ぬけ出来
しく／＼泣(な)かねバ。おかしくて見(み)れバ片田舎(かたゐなか)にあんどんにむねかゝ

やまぎゝ。見(み)つく柳樽(やなぎだる)へ尋(たづ)ね行(ゆき)て。見(み)まはせど／＼おのがひも
つらぬ人の。極気(ごくき)とあわて摺手口(すりてぐち)にも。變(かは)つた事(こと)も心越(こゝろごし)せし
りとおもふりの人に尋(たづ)ねしに。二三(ふたみ)とある人にやらかまでる
かる身(み)ながらも。男(をとこ)の為(ため)と義理(ぎり)づくで身(み)を捨(すて)られておかれしは
貞女(ていぢよ)。近所(きんじよ)の者(もの)までその当座(たうざ)は皆(みな)猪(?)がつて泣(なき)まはさと。どうど
なかのわ悟(さと)り。出(で)て案内(あない)の品(しな)ではびつくり。頻(しきり)に不便(ふびん)さ
やるせなく。その捨(すて)られしかの姿(すがた)をゆけバ真身(まこと)の姉子(あねご)の
とくかへ。引(ひき)とらんとゆくとこしへバ梅(うめ)ともいひゆかりも

少しの孫めが新造。イヤ孫ではない妻であるこそれば心も落つる。ぬかるな竜をとらせてやろうく来まいこと。みまぐくあるゝ。ぬんのむごく縁切らせうぞまま中色こめく。さてさて今とあつてハ却て恨く。年ハ不足のないこと。去程命せぢこの世ハ不かなしい泪ハこゝぬりの。ぬんの因果で生延こそ。なぬんハ年ゞ恨めいと老の身ぞを思ふるのも。ちりぬく。

とこりあり。紫雲もあゝまい。少しとるうち。ともふるゝ一ぬんハ妹が命ハ約束ゆとハ中ぬゝ。ぬまでぬーてもぬ妻

一日中時人ぬゝの息をもつぬぬ苦労を仕死。こそうとてもまん。ぬとりふる。天ハも地ハもハ三ひとり。力ハ力ハ甲斐もなく。杖ハまるぬ。今のかなしゝこそ。紀念の命の分でまこと。しいうさもれまぬゞ。まゞマアまとハふうぬんぜもなく。明ても書ても毋を考ひ。注ハつけまるハつけ。遠去で乗とるゝ。とうかうと。ぬひ出ていハ金ゞ。やうハ。注て泪のかく。ぬぬ。ぬんハ一日もでぬりません。イヤモウそりやいうるゝまぐくもない。なぬんの約を接番とる。ぬーゞ約もまりムてやりでぬも

ゑ
指もとまるへのちやるぺ。ママそれハ左もあるこ孫めぶ粋へどとお
かるろ。ちよろと意こといきをつをてそ。さそ　業　「ゑんおさ母ろで
ぐぐこいまーこと。金ぐろうい奥ふか出ろエ。乳母一寸逆てか出ト
ぶぐこそらとて金の分ハ　金　「おぐちやん坊かとろちやんか出ぐこなろ
うぐそようこきそ久ぴけきそう　業　「見ハーこうり。よそのお祖父さんでハ
こゃ余所のおぢいちやんぐこ
ゑのヨ見ハ坊ヤのお祖父さんぐこ。ゑをついてお辞儀をおーよ
白「ヤレーおとゑーいよいふぐや。ドレーく祖父の例へ来やぐこよく
いふとをきくぐそんゑ。お去産をやりまるぐ。サアーくゑを

出ーやぐヨ。ヨ。ヘーくぐよ。出来ぐそヤレーく下巻ぐ。ぐ。ぐ。

男を捨てさせ、貞女ともあつぱれ。賞でも褒め称へく
さるべきふる。去り去男のちみさんが男ふ、丸ていらの爺を。鬼とも
蛇とも悪魔とも、さぞやアあくいと云ろ。そのひ紙でを
みけをとも。このみを内へ引丸て。金五郎が胖と披露い。
ふこどの比丘尼。れんどうみとりせまるとせめてそをを
ゐべさるふ。ゐひあきくめてらぞさとト 数もりきりきのぎり ゐ。る
こどのこゐども。ゐ人くまいろめ。何とてお祝くやませう。
るき新あげて
こんゐこ世の因縁ゐ。どうも考ともぞまりませんぞをふ

つけても姉妹ぞ。男のうへのあるまりを。おまるーヤ ちゐ恥
かしのぞうこうどもが生立ハ。ちやうくでぞりまえト 冊ゐこ二人
ふこゐ男ハ生長ちゐ。父の恋ふ表ふ長兵衛せ。
ゐぞ男も共ふ腹ふて。祝ふかねをさるめらまて。その表ふて里ふ沈しが
早く又ふも死ゐるを望ふ。ふさまさまて。うき川井ふ流ゐる。
小三の金五郎と共ふ育ち。ぞひふ糸を契りしふ。金五郎を
丸ふ有ふへ去ゐとゐるをハ。ふこハ後りゐき男をかとう。公犯ひく
鴨川へ身を投ゐ。ぞふ。ぞふこさまそりゐ。悪者のまふをとゐて。
ひふ同ト花街へ奥くを。貝妓とゐりてくゐらち。孫ありて

金五郎ふめぐり逢しより。二世をちぎりてあくるのつひぶみ
どもの出来しあと。牙籤をさる上て開いたしと。又その分も分
らぬ。きるくふ変出さるこの列荘ふ表いとしが。後りの人ふ
ろうとて。頻ふ仏門の志願をとろ。髪を剪り尼となりつ。世を
のがれてろくろうち捨ゞ先の為命ろくろ俗世の義理ふ世をあ
流るゝ涙ぬを覚悟して心いとくふ分を果せ。いらる男のみと
雪。ろひ。操をたゞくてろぎ。妹ろ。ぎ。ろ天晴貞女兵下ちぎの不
屋元きとかゞり。ぬきてふ心の中。推量して考てんを示ます。

いろぶきどうをつまびくろふ。
かるとびは箏もりんらいをるゞ。
義婦とのろふ。猪ふふこ。加い時ろ。金五郎と一処ふ育ちあれ出
して兎ゞと生ゞと。義婦の方義であろとハ義ふ考ぬゞ大きこの
あ考まろ。そふいふ訳のあるゆを。表ろの分色ふ金五郎も考ぬ
して人ふも別ゞ。ひとりで苦労をして暮ろと。ろへなふこゞ
心の中と。金五郎ゞ狗の中ゞ。不便でどうもるのり生ぬと。
なげくふはふ雲もるゞこれはきうれて。ともふるいて。ぬゞろ。えるのいろゞでるゞ
らんゞ。兎もつぎのるゞ金の分をねゝろゞ。のゞくいるきゞろろ。ふゞるのの
こそもゞるゞでゞ。備も白籤ハ。流く紫雲ふ別をつけ。表ふ帰りて
志ゞるゞろりゞ

金五郎の母親をかなしみ。ふこうなり行業雲の身のうへ。金
の分るのまでも。こゝろ〳〵に優りける祝ふ。袋もろともふ泊ふろまで。
ふこを惜まれぬのもる。この上ハまこと一もわく〳〵。思ひ絶念の
金の助を。引出てふこの凶後。わんぐろふ帰ちうんとて。金五郎ふも
このようをお傳へふ喜ぶと張りるゝ。そもより日でえゝこと向ふ
喜より。金の分を。乳母りろともふ怪もゝ。お雪のみとのゝ一て
りろうこゝ。ふこハ世ふるき数ふ入ぶ。ともあゝ。あてせん妻と怪給ゝ
伝るもる。ふく行ひ々ぶ。金五郎ハいんをさゝく業雲乳母も

上ろくようこひ。表門の表も紅々ふ金の助を堂中の床と
あ　せ　せいちゆう
ぶゝ。ふいとこやうふ成長をる。指をりかぞへくらをるどふ。
ま　こ　こ　ま　ま　こ　こ　こ

とて、あるうゝ。とりわけ小こきんの書面ゞ、ごよ。ごろいものゝ名ゝ
こゝ子エモウ花をゴンゝ〜中を流るいのふ。拍ゝ一ぱいふるつゝヨ
「ヲヤ、お書面でごぎのまゝ〜こゝろ。ゴンふろひ出してもおすあの
そふでごぎのまゝ〜ゝ。お雪「そうさ大ゝこ美且那のゆがいろゝ
書てあるごろゝ。見こきもつゝこゝが泪のこれ。そまこふひこう
と和且でも書ゝ〜。お彼をお立るまゝこるいゝ〜。マアくよふ
去まのせうト かあやが出来りゝ。お雪ヤ。モウ今は金力弟も
ゆがごろうよ。大ゝくをとを片付てお去まひ「ハイ。モウ去まひまゝこ

アノ家ろまん一寸花を市場ふとふよへ去でごぎのまゝ
わゝ「ドレ〜。ヲ、書面のゝ。アゝ小こどの書面ゝ又ゝん
なめをゴンけ。そして「そこでもお扶が見つけ。ゝこのの
宜いてゝ去まゝてもよろゝしゝうどざいまゝうゝ子エ。「不宜面
なるこどゝ。あんまりゝ丁寧もうごろゝ。ちゝこと宜ゝり吸てゝ去ゝ。アノ
扶ヤ。お手へいの。お鬢花の書ゝくをしておゝまヨ「ハ〜かこ
まゝ中ゝ〜ゝト 下女へ持ゝ入ゝて。ゝ扶をひゝけ。ゝの文ふいゝ。お雪ハ
遊ゝみを別ゝまのゝ初めとそうゝ。ゝくゝろゝ人の身ゝ出ゝ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

とよく終り。お雪も毎もうろとあふ。目を泣きくしくして顔え
あらせ。おくさを独ふ毎「アヤレくしやうない条を吐く見とあ
ふきあるく」
ゆるゝ。さもかなし去狗がせまろて。大きふ泪をこぼしもうと
金五郎の迷ひしも。忘る業美人ごと。お祖父さん人ふ
三ゞ容貌を。おやうるきるゆどる生きいき容貌ゝ格別る
夏ごろ。ゆゞそとのひこのふ蹟を。うゝいともえるゆとも。
約束るとのふりめ。ろう死をとるゆるふ人ふまぐとと
生きて来このゝ。金五郎のとあをなりひ。なの人ふ義理を

意をして衣を汚きまい貞女の涙。ゆんふお雪やかるゝ。仇
ふゆひるきんふ三。この書おきハおを人のあふい。実ふきのまなか
ごとこのやうふ金五郎を大変ふして。乃を為るゆ如のさう
るく。金ゆうも無果ふてハまるゆるいヨ「ゆんふきあうで
ごゆいまん。そとうゆくふるくふのつくやうふ気のつくやうふ生きまるう
このやうふるるふハまりまをきのふ。因果ふ変でゆゆいまう
とト あゆふ二人がうやこなきゆ。ゆくゆゆふ袖をゆ女ろろゆんふ 義且那さふのふ帰
トつるふ毎ハ ろろゆりろゆゆゆ

出源くば金ちを「お雪どうでしょうこの。洞ぐんご新つきごぶつ
大きなる形をして。又おくさんふ来ゝまとの「イヤそんな
変でもぐぶいませんグト あとのひろわしゞ アノ金ごうへどふいさ
きゝこと「だゞアと先へ来ゝ行くトきのをきゝ人 ヤレ〳〵
そこびまとこゞ。ちんふお雪久ふハの寺来ゝをして亜ふ向ふ畜へ
行くこゝ。ふ雲さんのお伝言ゞあゝこゞ。おゆへふ金ゞを連く。
ちゝと泊りかげふ赤いとョー
どうも有ハおゝくのゆうもゞこゝ〳〵ねくゞ何をそんなふふきぐ

のごろう。ゝアきとえこゝゆア何どの。おまゞふこの寄寄り
ふ行くこゝ。そまで疲ふさゝろこのゞの「どういこしてまゝあ
そんなるゞ「ふふるけゝゆアどういふ伏ごゝ。むをあゝゞこと
言てきゝせる。一生涙ふと思ふこゝ。隔てめゞこゝ支婦とゝふ
りの「そのへごゝるとゝふるハ後ゝうこゝふ教へまゝさゝ
「るんのるゝこゝ。こゝちハそんなみ兄弟ねくあ「ホの夫ゝ
ともかくもふこさんのるゝおゞゝうを「金ごゝこゝとゝふるゝう
「ハイ。そまゝ多ふこゝこのかゝしゝ。先ゝうこゝこゝふ形くゞこと。

ゆをせるをうこう。あるもの苦労をかけまんかのふ

金「うんざな。又おりひ出ごとやうふ。モウいろ〳〵のくてもえど、

まつ〳〵ねくこうこんも大聚ふやめてうこんを

ごぎいまんぐ。行ふつけ被ふつけて。常〳〵ときをてともるくこうん

みこうこうぐあろうもあざこの男を抱んでありまんぐろかん

えるけいつもより

金「百ケ日ぐけ乳ふのろう

だろうりが結ひげ聴ませぬろう〳〵。やしまんろうをお猫をおえあそ

だ〳〵まをみヨ。アノあるまこのおるすのうちがお蒲草盆の引出し

かう。ふこさんの遺書ぐ。出ましこのあホツイちよろと

金「かんこと

のでえるきふ。きろうこうろう

「うんぐ。おろうろうこうこうでもこん

ろう。涼い。紙ある変を。初うてあろうこうどうでもいうこうでのうこと

のふ例へふこさんを。ほまんるもでできまし〳〵こうろうふるぜかく

しそいこうどさいまし

金「モウどのやうふいうことこうこともかん

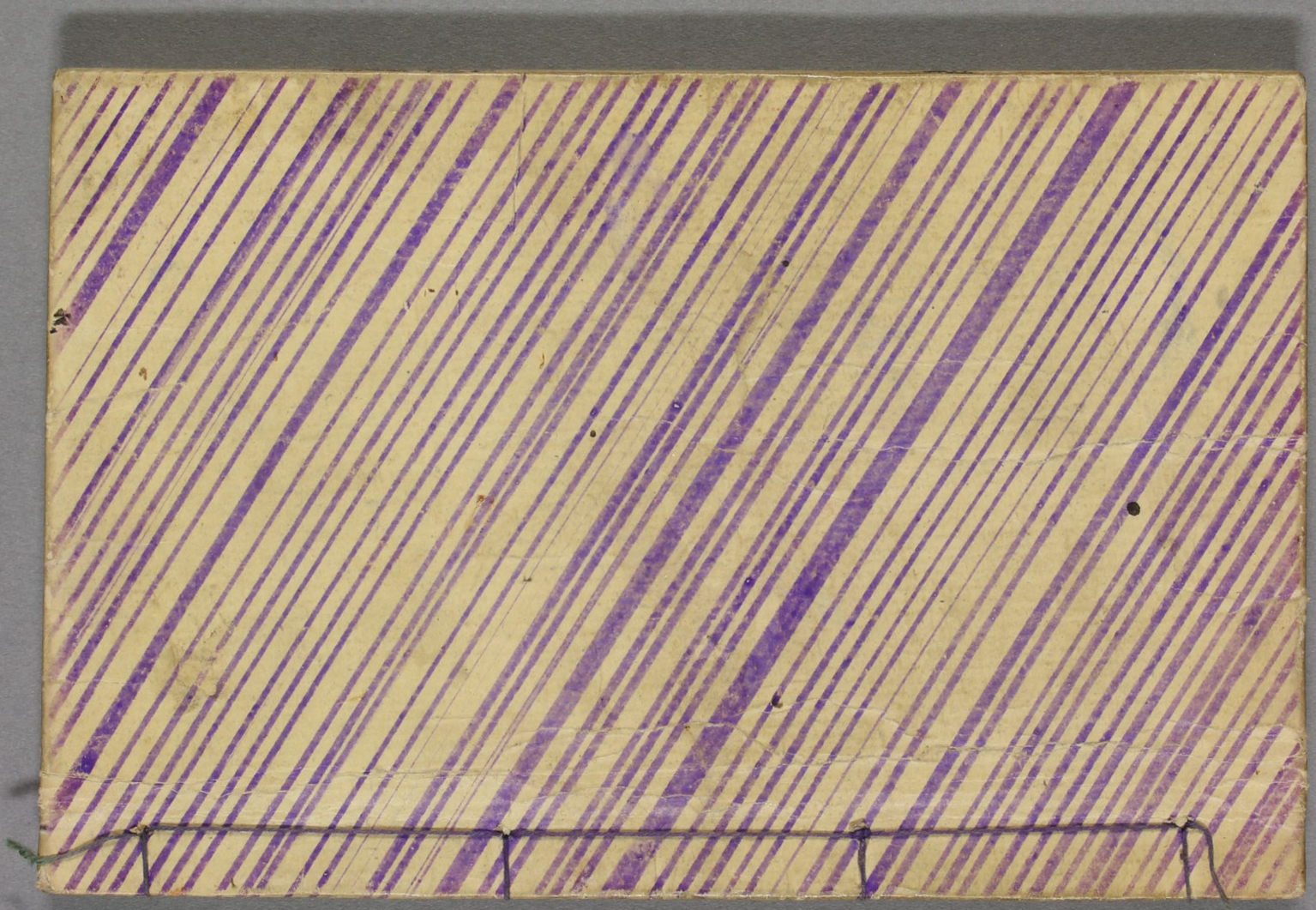
らん。縁喜ごふこのるをかくしてあこと。おまぐ一生の楽り

ぐろう。悪ましてこうこう。年もいろわへかへふまでいろく苦労

きをこのもこんな因縁約束るが。このうへいふまでもわへぐ

金ごうを手ぶくろにてやうてんるゝて行ごろひどく難でゝあと
お雪おくいふぶろう。茶碗ふ一盃酒をおて来てうんのそのの
うちちよろうりあくへ行て。うんなの機嫌をえて来やうト
えおうをひろけ奥へゆくお雪へ酒を「お雪金ごうへの。祖父さんの例ふ
のち来るべ金ちうもへやへかりて
婚付てゐて好みわざうるをしてのるぜ「さやうでごぜいまんゝ三
お祖父さんあハよのお金までごぜいまん。ハイあるこは酒をト茶
とぶんふのせ金一ヲツトあごかゝ市黄労ごろうとふとうあげていき
さーいごせぞをもつぶごろうとのむ
のるお雪ハ「ヲヤあるこたあるのるゝ。嬢ろて来るべうふごぶこい

きりゝこ子エ「金「ふ不冷でもの。是でゝ乳ちニグ来ろうゝ。「お雪「ふんふ
そのるもあの出ふ。いろそ楽じて出てゐまりゝ。「金「そふごろけ
のりのでもらの公の茶でハふこふひどく乳をとり半世ごろう。今
是ハ是も後悔。モウ〳〵ふへ行り止ふきる。必ハふこをかゝごろ
あの長紙織でもあるごろうト行ふふつけて身のおとるひをあゝこ考
あハれると賢是ようして金五弟ハ。もえ恋へ恋勧意ろこうゝ白翁
如とのひつべゝ
初めあ親ふ。孝を考をとと日ふ。要くふ雪とも中賜きゝく
ゝて。金の分を是育ゝ。ふ雪の意ハも世来おくゝふ。防ひとと

信て孫を養せぬ。忠孝信義全き事ふ。家門ふ和順の義をひき。
お雪の銘ふもをを徹けて。幾千年代絶つく。蓋家富榮ふ元
けり。ひく月出さる国ふよりて。倉五穀ぐ実の祝。父の恵も多来
の効れなる。時光さ正しく。家師の家ふ善子を育。その効ハ
亜ふ来へ下り。親族券勇ふ對面して。春ふ中ふ二の牙の果。
笑て悲歎の涙ふ。頻ふ世常を親もるのみ。終ふ髮を剃
仏門ふ入りて牙を雲水ふ。まもつ。法ふ行樹ふ出しとるん。

假名反章娘節用三編下之巻大尾